



Title	アイリーン・グレイとジャン・バドヴィチの対話篇： 近代における「装飾」の論理
Author(s)	千代, 章一郎
Citation	デザイン理論. 2020, 75, p. 48-49
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75338
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アイリーン・グレイとジャン・バドヴィチ対話篇： 近代における「装飾」の論理

千代 章一郎 島根大学

はじめに

アイルランド出身で 20 世紀前半を中心にフランスで活動した家具デザイナーであり女性建築家であるアイリーン・グレイ (Eileen Gray, 1878–1976) については、一連の家具作品やルーマニア出身の編集者であるジャン・バドヴィチ (Jean Badovici, 1893–1956) の助言を受けて実現した自邸 E.1027 (1929) においてある程度評価がされてきた。建築論の性格を帯びたグレイの主要な言説は *L'Architecture Vivante* 特集号 (1929) (以下、『特集号』と標記) に発表されたバドヴィチとの共著論文があるが、グレイ自身はこの E.1027 に関するもの以外に、ほとんど言説を残していない。

『特集号』にはバドヴィチとグレイとおぼしき匿名の二人の対話篇が含まれているが、遡れば 1924 年から断続的に発表された 5 本の対話篇形式の論文があり、すべてバドヴィチの単著として発表されている。すでに既往研究でも指摘されているように、これらの対話篇における対話者はバドヴィチが創作した架空の人物ではなく、グレイ本人を示唆している。実際、これら合わせて 6 本の対話篇には主題の継続性があり、基本的には質問者がバドヴィチ、回答者がグレイというキャスティングである。

そこで本発表では、これらの対話を時系列に辿ることによって、「装飾」という通底した主題の変容過程を分析し、その変容の要因について考察することによって、グレイを通して近代における固有の「装飾」論理の生成過程について明らかにしたい。

6 つの対話篇の主題；「装飾」

グレイが関与したと考えられる対話篇は、下記の 6 本の論文である [以下、対話篇 (1) などと標記]。

- (1) Jean Badovici, « Sué et Mare », *Intérieurs de Süe et Mare*, Paris, Albert Morancé, 1924, pp. 7–10
- (2) Jean Badovici, *Harmonie, Intérieurs de Ruhlmann*, Albert Morancé, 1924, pp. 5–9
- (3) Jean Badovici, *Intérieurs français*, Albert Morancé, Paris, 1925, pp. 5–11
- (4) Jean Badovici, *La Maison d'aujourd'hui*, Albert Morancé, 1925, pp. 11–18
- (5) Jean Badovici, « L'Architecture utilitaire », *L'Architecture Vivante*, automne et hiver 1926, pp. 17–26
- (6) Eileen Gray et Jean Badovici, « De l'éclectisme au doute » in « E.1027 Maison en bord de mer », *L'Architecture Vivante*, Éditions Albert Morancé, automne et hiver 1929, pp. 17–21

バドヴィチがはじめて対話篇を発表するのは、1924 年の 2 本の論文である (対話篇 (1) (2))。バドヴィチは 1923 年にアルベール・モランセ出版から年 2 回の建築雑誌 *L'Architecture Vivante* 誌の刊行を始めているが、この 2 本の論文は、それとは別に同じ出版社から出版された。主に家具製作を中心とした装飾芸術作家の作品集に附された論文であり、アール・ヌーヴォーからアール・デコの移行期における家具を中心に壁紙や照明を含め

た室内空間の「装飾」のあり方について一般的な議論をしている。

1925年以降も継続して *L'Architecture Vivante* 誌において建築作品の論評を繰り返している一方、バドヴィチは同年には「フランスの室内空間」と「現代住居」を主題とした2冊の作品選集をモランセ出版から出版している。それらに附された対話篇もまた、単発の論文でありながら前年度の対話篇の議論を引き継いで、2人の匿名の人物が主題を室内装飾から住宅建築一般へと主題を延長して対話を繰り返して、「装飾」の論点が拡大解釈されていく(対話篇(3)(4))。そして、この年から、徐々に2人の人物の立場が対照的になり、その形式も質問者(バドヴィチ)と回答者(グレイ)の対話形式に形式化してくる。

1926年には、*L'Architecture Vivante* 誌上において始めて対話篇が掲載されることになる(対話篇(5))。「有用な建築」を巡る対話は、明らかに「現代住居」についての対話を住宅から建築物一般へと拡張したものであり、2人の対話者の論点の相違が必ずしも明瞭ではなくなってくる。しかし質問者(バドヴィチ)と回答者(グレイ)の対話形式は変わらず、*L'Architecture Vivante* 誌上で継続しているバドヴィチの建築論評の基準が回答者(グレイ)の立場に影響されている(あるいは誘導されている)と考えることもできる。こうして、「装飾」に始まった二人の対話は、モダニズムにおける装飾否定という発想そのものが前提とされつつあり、論点とならなくなっていく。

1927年以降も、バドヴィチは *L'Architecture Vivante* 誌の刊行を続けているが、対話篇は途切れる。ヴェズレーでバドヴィチが手がけていたいくつかの住宅の助手をすると同時に、グレイ自身も自らが主導して E.1027 の設計と建設に携わっていたことが大きな理由であろう。実際、1929年には *L'Architecture Vivante* 誌においてこの E.1027 が大きく取り上げられ、はじめてバドヴィチとグレイの連名で対話篇が附されている(対話篇(6))。

この対話篇もまた、これまで同様、2人の人物が特定されることはなく、また E.1027 について言及することなく現代の建築理念について主題が展開し、そして不思議なことに1924年に始まった対話篇と同じ主題、「装飾」を巡る問題へと収斂する。すなわち、当時の前衛的建築の擁護者であったバドヴィチは、次第に「装飾」の否定へと論を深化させていったにも関わらず、グレイはその「装飾」の議論をもう一度再定義するような議論を展開している。そして結果的に、これが2人の最後の対話となる。

おわりに―「感性」の定位

こうして回答者(グレイ)は、一連の対話篇において、「装飾」への問いは、「装飾」のある一面では否定的に、ある一面では空間論として様々な肯定的に論じられ、その主題さえ等閑視した挙げ句、最終的には「装飾」を「固有の装飾」として再定義するに至る。それはもはや、内部の生活空間に設置される家具としても、その壁面を飾る絵画としても指し示すことのできないものである。

そのような「装飾」は、いみじくもバドヴィチが言葉の上で「環境としての装飾」と詩的に評したものに他ならないが、バドヴィチにとってそれはあくまで合理的精神による「知性」によって実現されるものである。バドヴィチにおける「装飾」は一貫して「装飾品」であり、アール・ヌーヴォーを含むロマン主義に対しては、様式論としての装飾否定の立場を貫いている。

それに対して、回答者(グレイ)は一貫して「感性」を「知性」から排除していない。「装飾」は「環境としての装飾」として、「純化された感受性」を呼び起こす仕掛けとして位置づけられているのである。